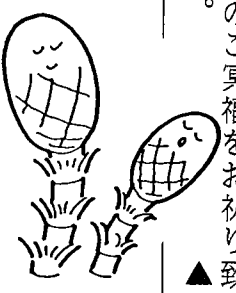


阪神大震災に思う

元深町女性会会 村上百合子

一月十七日早朝起きた阪神大震災を振り返って見ますと、木造住宅密集地帯と併せて道路の整備が不十分であったこと、大都市としての水の貯えが乏しいこと等でやっと消防車が現場近くまで行きながら消火活動が出来なかったこと、更に「情報のネットワーク」がとれていなかったため、政府の対応が遅れたこと等が被害を大きくしたように思います。



各交通機関が寸断され、全国各地からの善意の救援物資もスムーズに届かなかったため、避難所の方々は不安の上に飢えと寒さに苦ししい生活を強いられた。このような悲惨な状態に心を痛めました。テレビの画面を通して被災者がお互いに励まし助け合っている様子、多くのボランティアの活動、復興に向けて逞しく立ち上がっていることを知り、たくさんのことを学んでおります。

武蔵の真意

二月号選載
二編
斎藤哲三

「小次郎やぶれたり、勝を得んとするものがなぜ鞘を捨てるか」西暦一六〇〇年代岩流島での対決で、勝負の前に武蔵が、「あんな卑怯ともとれる言動で小次郎の気持ちを混乱させ、剣への集中力を阻害した」とあるが疑問である。だがそんな言動は実際にあったにしろ、我々が想像するものとは全く異なった意味深長な理性の働きからくる内容のものを堅持していたことは、今となっては想像できる。

彼の人生大半は、放浪と求道の旅武者であったように私は受け取っている。小次郎と武蔵の対決は、私が二年度の紙面で述べた、末身思想と末身思想否定の対決であったように思われる。即ち、生けるものはいずれは滅びて無くなるものであるから、生きる糧である一木一草に至るまで執着することはナンセンスである。

梅一輪

一輪ほどの暖かさ

町内会委員 小林徳蔵

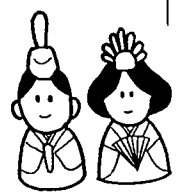
下組の満汐梅林をご存知でしょうか。二月の半ば、一通の書状が届きました。招待状でした。

町内会長小林徳蔵様。梅もほころび花見の季節となりましたが皆様にはご健勝の事とお喜び申し上げます。お陰様で満汐梅林もようやく軌道に乗ろうとしております。(中略)

この度、園地内旧火葬場に追悼碑を建立し大通寺御住職様にお越しいただきまして下記のとおり法要を営みました。是非御出席下さいますようここにご案内申し上げます。平成七年二月十五日、御調郡向島町干汐、浜浦一三。

浜浦様は毎日向島から深へ通っておいでになつています。案内状をいただいた後、町内会役員にも計り、町内会会報に事情を述べて下組全戸へ伝えました。

その結果、地元民二十数名が、追悼碑前の法要に参列することになりました。期日は三月四日、深は江戸、明治、大正の昔から近隣地区との交際が上手でなかったといわれています。



彼はそれを剣をもってした。即ち、剣は求道的手段にすぎなかった。剣は目的ではなく手段であつてこそ(別人が言ったと伝えられる)活人剣といえるだろう。

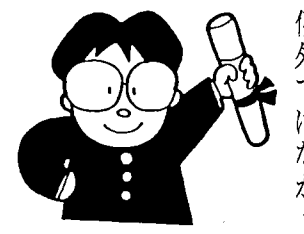
茶も、禅も、禅も。かくして崇高な理性を求めていく道こそ、手段である剣をいやがうえにも上達せしめ、茶の芸、禅の心の域を高め、いくことができる。彼は思想の面においても、剣の面においても、小次郎より圧倒的に優れていた。で、彼を一撃のもとに倒すことができた。



- ☆岸 正勝様 六年十月 薙
- ☆勝岡茂樹様 七年十月 薙
- ☆田島宣之様 六年十月 薙
- お悔み申し上げます
- ▼金掘秀雄様 二月十日 八十六歳
- ▼岩下 まさ様 二月十日 八十七歳
- ▼林 宏美様 二月十九日 二十歳
- 各種団体三月行事予定
- ★小学校
- ▲盛岡三二五 ▲鶴岡三二〇 ▲栗園式三二〇 ▲栗園式三二四 ▲終了三二五
- ★消防団
- ▲機城三三五 ▲香野友通三三三▲三七
- ★尚寿会
- ▲講演会三二七
- ★子ども会
- ▲おわかれ会三二二
- ★女性会
- ▲高年部会三二一 ▲親睦会
- ★町内会
- ▲上・善善善三二二

「深」という地名をその語感から他地域の人はどんなイメージをもたれるのであるのか。辺境、不便、さいはての地を連想するらしい。そこに住む人も併せて。しかし、勿論それは違う。道を定住地として来られる人も増えるだろう。四月に二九四世帯・九〇〇人が、一月末で、三〇六世帯・九三二人に増えた。新入学児童十一人の内、転入世帯入学児は四人で三六％

住人口が増え、若い姿が目につく町にしなければ町の発展はない。しかし人口が増えれば生活環境も含めて問題も顕在化するだろう。▼これをどう解決するか。今後の課題である。先ず計画ありきである。深町の将来を語る会も必要だろう。教師、反面教師として他地域に学ぶことである。



人間は未来が存在するか否かによって強く生き抜くか、否か、物を大切にするか、否かが決定されるようである。実際に自己という存在は滅びて無くなるのか、無くなるはないのかの問題は、又、次の機会に私なりの分別を述べてみたい。武蔵は求道の士であることを先に述べた。彼の理性ともいえる、強く生き抜いていくのだ、滅びることはないのだ、この意欲を己に定着していきこうとする過程を求道といったのではないだろうか。又、その幾分かを定着させたものを與義を極めた、又は、極意に達した、といったのではなからうか。

武蔵は求道の為、一木一草までも気配りしたが、健康維持も例外ではなかった。